

# KEIO SFC REVIEW

## 再発見、 看護医療学部

小松 浩子 / 奥田 敦 / 藤屋 リカ / 三次 仁 / 宮川 祥子  
岡村 みどり / 坪田 康佑 / 高丸 慶 / 矢ノ目 優 / 赤堀 美和子

sfcism

駒崎 弘樹

ようこそ、新任教授

石川 初 / 和田 龍磨

おとなりの研究会

井庭 崇 / 中西 泰人

When I was young

太田 喜久子

No.

# 59



# Table of Contents

## 特集

再発見、看護医療学部	02
学部長インタビュー	03
小松 浩子 看護医療学部長	
対談 総環 × 看護	06
奥田 敦 総合政策学部教授 × 藤屋 リカ 看護医療学部専任講師	
三次 仁 環境情報学部准教授 × 宮川 祥子 看護医療学部准教授	
看護医療学部での4年間を振り返って	12
岡村 みどり 看護医療学部4年	
看護医療学部のはじまり、これから ～看護一期生からの視点	16
坪田 康佑・高丸 慶	
誕生！湘南藤沢記念病院	19
矢ノ目 優 湘南藤沢事務室総務担当課長	
施設紹介 小さな図書室の大きなサービス	20
赤堀 美和子 湘南藤沢メディアセンター看護医療学図書室担当事務員（主務）	

## 連載

sfcism	22
駒崎 弘樹 総合政策学部 2003 年度卒業	
ようこそ、新任教授	25
石川 初 政策・メディア研究科教授	
和田 龍磨 総合政策学部准教授	
おとなりの研究会	30
井庭 崇 総合政策学部准教授	
中西 泰人 環境情報学部教授	
When I was young	36
太田 喜久子 看護医療学部教授	
From Editor	40

# FOCUS ON THE FACULTY OF NURSING AND MEDICAL CARE

## 再発見、 看護医療学部

総合政策学部と環境情報学部のキャンパスを下り、坂を登ると、看護医療学部のキャンパスが見えてくる。総環とはまた違った雰囲気のカンパスのなかで、どのような教育が行われているのだろうか。開設してから14年間、看護医療学部が大切にしてきたものはなんだろうか。

SFC REVIEW ではこれまでも何度か看護医療学部を取り上げてきたが、今回は「再発見」と銘打って看護医療学部のミクロからマクロまでを多様な視点から取り上げていく。



# 00. 学部長インタビュー

——看護医療学部の歴史について教えてください。

慶應の看護教育は、ちょうど平成三十年に百周年という記念すべき年を迎えようとしています。

その起源は一九一八（大正七）年に遡り、北里柴三郎先生が芝白金の養生園で看護師を養成したのがはじまりです。それは一九五〇（昭和二五）年に厚生女子学院という専修学校に建て直されました。一九八八年には短期大学になり、二〇〇一（平成一三）年に看護医療学部として現在の学部教育がはじまりました。学部としてももうすぐ設立一五周年を迎えます。二〇〇五年には看護分野の大学院として健康マネジメント研究科も設立されました。慶應看護はこのように長く深い歴史のなかで発展してきました。このことは看護医療学部の

ホームページに歴史年表としてまとめて皆さんにご覧いただけるようになっていきます。

——SFCのなかで看護医療学部はこれからどのような役割を果たしていくのでしょうか。

今は少子高齢多死社会といわれ、社会全体が大きく変動していますよね。特に人々の健康に関しては、病院を主体としたケアはもちろんですが、病院間の垣根を越えてそれぞれの地域、社会、そして世界との結びつきのなかで問題に向き合っていくなければなりません。エボラ出血熱やSARSなどの感染症や地球温暖化などの環境問題に対しても、地球規模の視点からそれがどのように健康に影響をもたらすのかということを考えていく必要があります。

看護学は人が心身ともに健やかに暮らしていくことを援助するために、知識や技術を統合してケアを提供する学問です。SFCは学問を有機的に融合したり、幅広い学問的な知見を集結させたり、またあるべき

方向性に統合したりするということが重要視されています。そしていろいろな学問を学ぶ人たちが手を携えていくことができるキャンパスですよね。このことは看護にとってメリットの大きいものでしょう。

ですから、看護医療学部の果たすべき役割は、たくさんの課題を看護だけではなくてSFCの二学部をはじめ、医学部、薬学部、理工学部などさまざまな専門の人たちと手を携えて考えていくことだと思います。

看護医療学部生のみなさんがいま学んでいる看護の基礎技術というのは、どのような国でも人々が心地よく清潔で、良好な栄養状態が保たれた暮らしを提供するための知識や技術です。これらをいろいろな状況に応用していけば、どんなことができるのでしょうか。

災害が日本のあちこちで起こっているなか、劣悪な衛生状態にあつても人間の健康をどう保つことができるのかということ、天候や環境を含めた人々の暮らしと健康を考えるためには、多軸、多次元で捉えなくてはならない。災害のあと、復興を考

え、実現していくためには、いろいろな学問分野の人たちが知識を持ち寄って考える必要があります。

現実起こっている事象は私たちが予測しているよりも速く変化し、広がり、さまざまな問題を含んでいます。これから起こりうる事象を予測しながら解決していく段階において、人間への治癒や癒しに繋がる技術や専門知識を持つ看護は大きな役割を担うのではないのでしょうか。

私たち慶應の看護が開拓的に先導しないと、今の難しい健康課題は解決できません。今年SFCが二十五周年を迎えましたが、次の二十五年はさらに変化が著しい時代になるでしょうし、この先の社会で中核を担い、五十年後、百年後の明るく希望の持てる未来をつくっていくのは今の学生のみなさんです。SFCのような多分野の人たちが集うところは看護医療学部があるということは大きな意味があると思います。

——看護医療学部の学生は総合政策学部と環境情報学部の講義を履修できるとですね。

——学生にはどのように育ってほしいですか。

一つは、人間に対してあたたかな

そうですね。講義だけでなく研究会にも参加できます。他方、総合政策学部や環境情報学部の学生が看護や医療に関心をもってこちらの講義に参加するということができます。しかし、両学部から看護の講義を履修している学生はまだ少ないようですね。相互交流を強めることは大切だと感じているので、より行き来が盛んになるように努めたいと思っています。看護医療学部でも、スーパーグローバル事業の一環として、未来創造塾をはじめとする海外学生を受け入れるプログラムを実施すべく、準備を進めています。SFCのいろいろな人たちとも一緒に活動していきたいですね。

まなざしを持ってほしいと思います。たとえば、老いるということについてネガティブなイメージを持っているかもしれませんが、その側面だけをみるのではなく、一人の人を信頼し尊重してほしいのです。大学ではそのような学びをしてほしいと思います。

そのまなざし抜きには、さきほど言ったような、先を読んでさまざまな学問的な視点から考えることは難しいですね。そのような意識を持ちつつ、知識や判断力を備えていつでもraithたいですね。

また、学生のみなさんには実践力を身につけてもらいたいと思っています。ここで言う実践力というのは、人を癒したり、人が希望を持ち続けたり、人が自分の潜在性を活かしたりできるようなケアを行う力のことです。学生には希望を失わず新しい未来に向かって社会を築いていくことのできるような道筋をたて、世界

レベルで果敢に挑戦してほしい。そのような実践力を持ちながら、社会のなかの新しい役割をそれぞれが担ってくれればと思います。

看護医療学部の学生は医療や看護の専門知識を学びますが、それだけでは十分ではありません。健康という視点から考えても、医療の分野だけで完結できるものはあまりないんです。

たとえば、さまざまな病気を持っている人のケアをするときには医療経済の分野について考えますし、家族の形態も多様なので、それに合わせた学問的な知見が必要とされます。さらに、ここ何年か地域包括ケアという考え方が広まっており、地域社会のなかで医療を根付かせていくという動きがみられます。SFCでこうした学問を有機的に学ぶ体験をしているというのは、とても意味が大きいと思います。

むことができる学部です。人間の健康に関わりながら、ケアの実践を通じて、人間のたくましさや潜在性や可能性、また人間の素晴らしさを実感できる学部だと思っています。

他の大学とは異なり、総合大学の強みを活かした慶應義塾の看護医療学部は、看護を根幹にしながら広い視点で人々の健康について学べます。それに加えて、グローバルな視点で国際的に活躍する人材を育てるという理念があります。ぜひ、そのような視点を持っている受験生の方にいらしていただければと思います。

こうした講義やプログラムを通じて二つの学部と看護医療学部の絆をより深めていきたいと考えています。実験的にいろいろなことができませんし、新しい研究活動や地域との連携も生まれてくるでしょうね。

——看護医療学部に関心のある受験生にメッセージをお願いします。

看護医療学部は豊かな人間性を育

# Q&Aコーナー

**Q1** 看護医療学部には、学士編入制度がありますね。学士入学を導入した理由は何でしょうか。

学士編入学試験は大学の学びの多様化によって設けられた入学試験のひとつです。看護医療学部だけでなく他の学部、他の大学でも学士編入学試験は実施しています。社会が大学に学ぶ機会を求めた結果、このような制度が成り立っています。

看護医療学部は特に専門性がはっきりしており、実習などの演習科目を履修した上で、国家試験を受験しますよね。学士編入試験を受験してくる方も目的意識をはっきり持って入学する方がほとんどです。そのような方のために門戸を開いています。

学部全体からみても、いろいろな年代のさまざまな学びを経験している人がいるというのはいいことですね。逆に学士編入で入ってきた人たちにとっても、さまざまな世代の学生とともにさらに学びを深めることができるので、人生がより豊かになるのではないのでしょうか。

**Q2** 女子学生が多い理由を教えてください。

この学部は職業との結びつきが強いですね。学生のみなさんは、看護師免許といった国家資格の取得を目指しています。現に看護師は女性が多いですし、そういった特徴が学部入学にも反映されているのだと思います。しかし、厚生労働省のデータによると、全国的にみても看護学部を受験する男性人口、看護師免許を取得する男性人口のいずれも年々増加しているようです。社会全体がヘルスケアに関心を持っていることもあり、男女問わず増えているのかもしれないですね。

**Q3** 看護医療学部は、SFCの他の二つの学部と違って必修科目が多いですね。そこに理由はあるのでしょうか？

一つは、看護教育には厚生労働省と文部科学省の二つの省が関わっていて、国家資格をとるためには両省による「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」があるんです。そこで定められた必修科目を履修しないと、看護師試験の受験資格を得ることができません。専門職となることを目指す医学部、薬学部でも国家試験に必要な能力獲得のためにカリキュラムが編成されています。必修科目が多いのは、そうして定められた講義を受けて、看護師となるための受験資格を得るためということですね。



**小松 浩子 (こまつ・ひろこ)**

看護医療学部長  
専門は成人看護学、がん看護学、緩和ケア

対談

## 総環 × 看護

総環と看護では扱う分野が違うと思っている学生もいるかもしれないが、  
実はアプローチが違うだけで、同じ分野を研究している教員は少なくない。

今回はイスラーム分野の健康問題についてを奥田敦総合政策学部教授と藤屋リカ看護医療学部専任講師に、  
医療現場の情報技術についてを三次仁環境情報学部准教授と宮川祥子看護医療学部准教授に語ってもらった。

## 01. イスラーム分野

——藤屋先生も奥田先生もアラブ圏  
を研究と活動のフィールドとされて  
いますね。アラブ圏では「健康」に  
ついてどのようなことが行われてい  
るのか教えてください。

藤屋リカ看護医療学部専任講師

(以下、藤屋..)

私はNGOの仕事で中東のパレスチナに行っていました。仕事では母親や子どもと話すときはアラビア語で、それ以外は英語を使っています。というのも、当時、外国人と一緒に働けるような現地の医療従事者の多くは、アラビア語ではない教科書を用いて医学などの高等教育を受けてきたようでした。アラビア語で話していても病名は英語のほうがよく通じるということもありました。パレスチナの人たちが仕事でアラビア語を積極的に使ってこなかったことを少し残念に思っています。

奥田敦総合政策学部教授

(以下、奥田..)

そもそも近代医学はイスラーム世界が発祥で、アラビア語だけでも医学は勉強できるはずなのですが、パレスチナでは英語でしか教育されて

いないのですね。医学の発祥の地でありながら母国語で勉強ができないのは気の毒です。

藤屋..

そうなんですよね。一九六七年の第三次中東戦争でパレスチナ(ヨルダン川西岸地区とガザ地区)はイスラエルの占領下に置かれました。パレスチナには医学部はなく、東西冷戦下、旧ソ連や東欧の国々がパレスチナを支援したこともあり、その国々で医学を学んだパレスチナ医師が多いのです。

九十年代に入ってからエジプトなどアラブ諸国で勉強するパレスチナの人たちが増えましたが、一九九四

藤屋リカ  
(ふじや・りか)

看護医療学部専任講師  
専門は国際保健

年のオスロ合意以降もヨルダンとエジプト以外に渡航することは困難でした。そのため、学ぶ力があるにも関わらず、医学部がないために学べないという問題がありました。パレスチナにやつと医学部が設置されたのは一九九四年以降のことです。

奥田..

今回のテーマに沿うと、今の中東は「不健康」な状態だと思えます。そこでいろいろな対処をしています。が、現状は、やり過ぎて逆に悪い方向に進んでいるように思います。たとえば貰える薬は貰っておこう、海外からの支援はとりあえず受けておこうという状態です。現在、中東各

国はバラバラで仲が悪い。でも、一皮剥いたらみんな同じ人間なわけですよ。そこが重要なのにみんな忘れてしまうのです。イスラーム教徒の共同体では痛がる人がいたら、その痛みは共同体全体で共有されると考えます。イスラームという宗教はそのようなことを教えているのです。

このようにイスラーム教徒に限らず人間社会全体が飢餓や痛みや苦しみを共有できていると、世の中はさらに平和になりますよね。共有する意識がないから、自分や家族、一族、せいぜい国さえ良ければいいと思ってしまう。人類全体で関わっている意識があれば、健康という問題にはさまざまな課題が絡んでいて、痛いところだけを除去するのではだめだということがわかると思います。

——共有する意識が「健康」へと繋がっていくのでしょうか。

奥田..

アラブの人たちの全体意識や内の強いつながりを感じた出来事があります。私の研究会では毎年十一月に、ASP (Ahlan wa Sahlan Program) という、アラブの学生と日本の学生

が交流するプログラムを行ってあります。それに参加したアラブの学生たちは、私たちが現地を訪問すると、ぜひうちへ来てくださいと呼んでくれます。この夏もモロッコとヨルダンを訪ねた際、過去の招聘者が家族みなさんで歓迎してくれました。中東の人が日本に来ると、日本人はとも礼儀正しく、世の中が秩序立っているというところに感心していきます。逆に僕らがあちらに行くと感じるのは、一家総出で出迎えてくれるように内側の繋がりが強いところです。アラブは、家族という単位での共同体の精神が根強く残っているのですね。

藤屋..

戦争で焼き出されても、しばらくすれば親戚で集まって、支え合いながら生きていく。だからあちらの人たちからすると、仮設住宅でお年寄りが一人で暮らしている日本の状況は信じられないことなのです。

奥田..

ああ、信じられないでしょうね。そして、万が一ひとりぼっちの人がいっても社会が放っておかない。日本

だと孤独死が問題になっていますが、アラブでは社会が手を差し伸べますよね。アラブは戦争ばかりで危ない地域だという認識があるかもしれませんが、起こっている問題への解決の糸口が見つかるのではないのでしょうか。

藤屋..

先生、ジャマイヤって分かります？

奥田..

はい。ジャマイヤですね。

藤屋..

ジャマイヤは組織を意味するアラビア語ですが、共同出資互助組織としても用いられます。五人くらいが集まってお金を少しずつ同額出し合い、必要な人からそれを受け取って使っていくましようというものです。たとえば家族が病院で入院したなど緊急にお金が必要になった時には、お金を取る順番が変わります。これはアラブで行われていることだと思っていたのですが、日本にも頼母子講たのもしこうという相互扶助の制度があったのです。

今の社会では、どれだけの利益を生むのかだけではなく、どうやって人が過ごしやすくなるのかを考え



奥田 敦

(おくだ・あつし)

総合政策学部教授

専門はイスラーム法および関連諸領域、アラビア語教育



るべきだと思います。小さな単位での助け合いは、日本でもついこの間まで行われていたことですし、人間の持つている素晴らしい知恵です。アラブではそういうものが誇りとして受け継がれていて、豊かだと思えます。助け合いを保障することが社会の健康性なのだと思います。

奥田..

イスラームにはザカート（喜捨）という義務があります。たとえば、自分の稼いだお金のうち、生活に使ってなお余ったお金の2.5%は善意でなく義務として必ず貧者や困窮者らに与えなさいと教えていますよね。

——助け合いの意識はどこから生まれてくるのでしょうか。

藤屋..

自分自身はある程度のことば満たされているからありがたいという意識が、ジャマイカやなどの助け合いに繋がっているのではないのでしょうか。

奥田..

そうそう。その意識の根本にあるのは、善行を積み天国に行けると教えられていること。イスラーム教徒はある意味で欲ばりなところがあつて、この世でもあの世でも良く過ごしたいのです。あの世ではこの世で行ったどんな小さな善行でも必ず報われるから、この世での取り分はそこそこいいや、という考え方を持つと、死や病気に対する向き合い方も全然違うものになります。そこが日本人にはあまりない考え方ですね。

藤屋..

それに、イスラーム教徒にとつて神とは、あらゆるものを超越した「あるべきもの」です。自分の外側にも内側にも存在している。だから、自分自身の生を大切にすることに繋がります。知人が、イラクで子どもたちに、日本では中学生が自殺することがあると話すと、とても驚き、信じられないと言ったそうです。そして、僕らも大変だけど、日本の子どもはもっと大変だ、お祈りしてあげると続けたそうです。生きるということそのものに価値があり、自殺なんて

神が絶対に許してくれない。なのにそういうことが起きてしまうのは一体どれだけの不幸な状態なのかと。ちようどイラク戦争がともも厳しいころだったので、生そのものへの畏敬の念から出た言葉なのかもしれない。私たちが健康を考えると、自分よりも超越した存在を感じることで落ち着いて考えることができるのではないのでしょうか。そういう超越的な存在を信じている人たちの生活や信仰から学ぶ知恵は実はいろいろなところに隠されているのですが、今の社会はそれを見えなくさせているところがあるように思えます。

その知恵を知り、活用できれば、日本人ももう少し幸せや健康を手に入れることができると思います。

——地域を包括したケアを進めるには互助や共助が必要と言われますが、それらはイスラームの人たちから多く学べるように思います。

奥田..

地縁や血縁を越えて助け合いましょうというのが一つの方法です。災害に襲われると被災地に「災害

ユートピア」とでも呼ぶべき理想的な共同体が出現するという指摘がありますね。でも災害が生じてからユートピアが作られても、遅い。災害の前からユートピアが作られていれば、災害が起こらないようにできるかもしれない。そうなれば、もう予防医学の観点ですよね。

藤屋..

共同体とひとくちに言っても、世界には私たちが考えているのとは異なる意味の共同体が数多くあります。人と人との関係性によつて共同体はできていくものでしょう。小手先のシステムや仕組みだけではなく、まず全体のあり方や関わりを見て、システムがどう動くか考えてみる。こうすることで、仕組みをつくることばかりに一生涯命に見えかねない日本に、別の視点を組み込むことができ、もっと持続可能な社会へ繋ぐことができるのではないのでしょうか。頼母子講などが盛んだった過去を振り返ることも重要でしょう。

奥田..

それはいいですね。本当にそういう視点が看護や医学に入ってきたら

素晴らしいですね。

藤屋..

看護はそのような視点に満ちているはずだと思います。看護は患者さんと常に向き合っていますから。また、どのような形で人生を送っているか、その人らしい選択をするためにどうサポートできるかなど、看護はどう関われるかが問われています。いろいろな文化や宗教への理解を深めていけたなら、看護に関わる人たちも多様性と余裕のある豊かな関わりができるのではないかと思います。

奥田..

そういうことをぜひSFCでもやってほしいですね。

藤屋..

やっていきたいですし、まさにそのためのリソースがたくさんある。単科大学ではできにくいことでしょうから。

奥田..

それがたぶんSFCの中に看護がある意味だし、慶應の中に看護がある意味じゃないですかね。楽しみですね。

——先生方の研究テーマを教えてください。

宮川祥子看護医療学部准教授

(以下、宮川)..

ITと健康に関することをテーマとしています。現在研究しているテーマの大きな柱は二つあります。一つ目は災害時のヘルスケアと情報、もう一つは地域包括ケアのITによる支援です。前者は被災した人たちの命と健康を守るために、どのような情報連携が必要かについての研究です。後者は、人が病気の状態から回復していくときにある急性期、回復期、維持期といわれるそれぞれのステージで、どのようにITを使って支援していけるのかを研究しています。また、地域包括ケアで多職種連携をする際の情報交換の方法も研究しています。

三次仁環境情報学部准教授

(以下、三次)..

主に無線をつかった技術の基盤となる研究や物流システムの開発をしています。技術は大きく分けると二つあり、コンピュータで物の位置と状態を把握すること、その状況

に合わせて最適な制御をすることで。その応用として通常時や災害時のトレーサビリティ(物流)について研究していて、どうすれば物を効率よく動かせるのかを模索しています。

今一番注目しているのは国際物流です。実はコンテナで一番多く運んでいるものって空気なんです。輸送されるコンテナの中の六〇パーセントを占めているんです。無駄になっっているスペースが多くあるんですね。ですから、ITで物の位置を制御する技術を応用して同じ目的地に運ぶものを同梱して運べば輸送にかかるコストを画的に削減できると考えています。

医療に関するプロジェクトにも携わってきました。在宅でする薬の管理を手帳につける代わりに機械で行い、その情報をお医者さんと共有することで、薬の飲み忘れを防ぐ薬カレンダールという取り組みです。実はこれは、看護医療学部から政策メディア研究科に進学した学生さんの協力によって実現したプロジェクトなんです。彼女は看護の役に立つITシステムを構築したいという思いを持っていましたね。

これまでいろいろな研究をやってきてつくづく思うのは、抽象的な意味でのITシステムはつくられても、それを実用化するのには本当に大変だということですね。

いくら大学の研究で「べき論」を立てても、それが現実には動くとは限らないということです。すでにそうしたサービスをを行っている人や、持っているデータなどをオープンにしたくない人もいるんですよ。医療のIT化を進めるためには、それぞれが持っている情報や技術をオープンにしていかなければならないと思っています。

たとえば、カレンダーを使って薬を管理していると言っても、薬を飲む前にゴミ箱に捨てていたら意味がないじゃないかと言われると反論が難しいですね。

そこで考えたのが、薬の管理とは別に、薬カレンダーを安否確認のために使うことができるのではないかなという点でした。薬の管理をした人はお年寄りの方が多いです。同時に、多くの自治体が、高齢で独居の方の安否確認や地域包括ケアをするためにお年寄りを見守りたいと思っています。薬を飲んだサインを

送り続けてもらえば、自治体はそのお年寄りを見守ることができます。

### 宮川…

これからは一人暮らしの高齢の方が増えてくるので、見守ることへのニーズは大きいと思います。

すでに実用化されているサービスもあります。たとえば象印マホービン株式会社が開発したiポットという商品は、ポットに無線通信機が内蔵されていて、お年寄りがポットを使うとその情報がインターネットを通じて遠くに暮らす家族に届くというものです。このポットのおかげで、家族はさりげなくお年寄りを見守ることができそうです。ポットが使われるかどうかという間接的な情報に留まりますが、三次先生がおっしゃるように、ある程度健康に生活はできているということが分かりますね。

### 三次…

今の例はITが家族の範囲で使われる話ですね。そういう、ごく小規模のITシステムの方が人の繋がりがりの中に入りやすいんですよ。制度のように大規模な話になってしまうとにわかにはハードルが高くなってしまう。



三次 仁  
(みつぎ・じん)

環境情報学部准教授  
専門は無線通信、無線応用、計算工学

う。もちろん最終的には大規模なシステムにすることを指すのだけど、最初に人々へ浸透させるためには、まず、あまり規模の大きすぎないITシステムを使う方がいいだろうと思っています。

### 宮川…

話は少し変わりますが、いま話していた見守りサービスというのは、利用者と家族という二つの点をつなぐ、いわば「線」のソリューションです。地域包括ケアというのは、訪問看護師、かかりつけ医、地域の中核病院などの、いろいろなステークホルダーが関係しているので、「面」のソリューションと言えると思います。

す。このとき、訪問看護師だけではなく、かかりつけ医や中核病院の人たちとチームレスに繋いでいくことが難しいのです。

泥臭いことですが、経営主体や業務システムが違っているのにどうやって情報連携するのか、繋ぐ役割を持つITシステムは誰が費用を負担するのかという課題があつて、なかなか決め手になる解が見つからないのです。

——訪問看護ではどのようにITが活かせると思いますか。

### 宮川…

訪問看護というのは非常におもしろ

ろい領域なのですが、複雑なんです。先ほども言った通り、ステークホルダーが多いというのが理由です。また、病院のケアは、どちらかという医療者がリードする形になりますが、在宅医療の現場ではご本人やご家族がどのように暮らしたいかということが病院でのケアよりも尊重されます。共有すべき情報も、いきおい複雑になりがちです。

加えて、看護師同士の情報共有をスムーズにしていく上で難しい点があります。たとえば、同じ病院内であれば他の看護師や医師が同じ建物内にいるわけですから引き継ぎも比較的簡単ですが、訪問看護の場合は、他の看護師が違う地域にいるため引き継ぎがスムーズにできないということがあります。そうすると情報共有のコストや時間の無駄が病院よりも大きくなります。

ここにITをうまく使って、たとえばモバイルのデバイスを持ち歩いて入力することで患者さんの情報をすぐに共有できれば、一旦訪問看護ステーションに戻って引き継ぐ手間が省けるので時間が節約できます。そうやって無駄な時間を削っていくことでもっと多くのお宅に訪問でき

たり、残業が減って労働環境の改善が期待できます。実際に、看護医療学部の卒業生が立ち上げたケアプロ訪問看護ステーションでは、モバイルデバイスを導入して業務の効率化に成功しています。

訪問看護のニーズはこれから増えていくし、制度も地域包括ケアの方向に進むかもしれませんが、相変わらず訪問看護の人材が少ないのが現状です。少子高齢化のため、これからも人手不足が解消する見込みはありません。だからITを活用して訪問看護を効率化するのは必須のことだと思えます。ITを入れさえすればいいというものではないですが、地域の看護師はこれからのケアを担う貴重な存在です。この人たちが最大限のパフォーマンスを発揮できるようにITで支えるということは今後ますます求められていくと思います。

私は看護医療学部で「情報」を教えています。看護でなぜ情報の講義が必要かというと、情報を取つてき、アクセスメントして、この患者にどんなケアが必要なのかということを考えて実行する。そうしてフィードバックを得て改善策を考えるPDCA

サイクルを回していくためには、情報を取り扱うという「意識」が大切だからなのです。この患者さんは痛そうだったからこういった処置を施しましたという一時的な行動だけではなく、長期的に見た場合に患者さんにとってのよりよいケアには繋がらないのです。

PDCAサイクルを回すために必要な情報は何かという意識をしつかりと持った上でITとコラボレーションしていくことができると思います。看護医療学部の学生には、そうした深い意識を持つてもらいたいですね。

三次…

医療や看護の現場で本当に必要なITシステムは、看護師や医師など現場を知っている人たちと協力していくことで初めて実現できると思います。僕らのようにITシステムをつくる者としては、既存の技術だけではなく、新しい技術や現場から得られるニーズがほしいんですよ。薬カレンダラーのプロジェクトが看護医療学部出身の学生さんの協力によって実現できたように、大学の研究段階からそのような看護医療学部の学生さんがこれからもっと増えることを願っています。



宮川 祥子  
(みやがわ・しょうこ)

看護医療学部准教授  
専門は情報技術、ヘルスケア情報学

## 看護医療学部での4年間を振り返って

看護医療学部生はどのように日々を過ごしているのだろうか。  
看護医療学部4年の岡村みどりさんに、1年の頃から将来のことまで、  
看護医療学部で過ごした4年間について語ってもらった。

### どうして看護に？

——そもそもなぜ慶應の看護医療部に進学を決めたのですか？

もともと私は慶應のニューヨーク高校出身なのですが、大学の進学先を選ぶときに、看護学を学びたいという思いがあることに気づきました。きっかけは、小さいころから私の周りに看護師さんが多かったことです。看護師さんは常に身近で、私にとって仕

事のイメージが湧きやすい存在でした。保育園のころは「看護師になりたい」と憧れていたのですが、年齢が上がるにつれて、看護学とは何だろうというところへ興味が移ってきました。

また、高校のときに模擬国連に参加したこともきっかけになりました。参加者それぞれが担当する国と議題を割り当てられて議論するなかで、私はベトナムのWHOに関する議題を担当し、一年間にわたって調査をしました。そのときに乳幼児死

亡率や妊婦死亡率を調査し、貧しい国と呼ばれる場所の看護や医療の問題に興味を持ちはじめたのです。

もちろん、医学部に進む選択もあつたでしょう。そこで看護学を選んだのは、医療について学ぶよりも人について社会的側面も含めて総合的に考えたいと思ったからです。



岡村 みどり (おかむら・みどり)

看護医療学部 2012 年度入学、  
2015 年度卒業予定

# 看護医療学部に入るまで～1・2年生

——進学してみて、思い描いていた看護医療学部のイメージとの違いはありましたか？

入学以前は慶應の看護医療学部は専門学校ではないし、もっと広い範囲の学問として学べるというイメージを持っていました。しかし入学してみると、私が想像していたより専門的で、国家試験を視野にいったカリキュラムであることに驚きました。必修科目が多かったので、他の分野にあまり目を向けられなかったなど残念に思うこともありま

す。必修科目では、「今日の看護医療」という講義が印象に残っています。価値観や考え方は人によって違うので、患者さんにとってどのような治療がベストなのかは、私たち看護をする側が勝手に決められることではないことを学びました。そのことは医療の現場に限らずどこでも通用す

る考え方だと思います。看護医療学部での講義は、病態学に関する専門知識を詰め込む講義だけでなく、倫理やリテラシーについて深く考える講義も多く、多様な観点から看護学を学べたと思います。

総合政策学部と環境情報学部の講義も受けていました。プレゼンテーション技法や、富田勝先生（環境情報学部教授）の先端生命科学などの講義をとって視野を広げることができました。



看護医療学部の  
教室風景

——サークルには入っていたのですか？

入学した当初は運動系のサークルに入っていたのですが、サークルよりも外部団体の活動に尽力していましたね。六月に高校を卒業したので、大学に進学するまで一年近いギャップがありました。発展途上国へ行ってみたいという思いがあり、保健医療分野を中心に国際協力を行っている「アデオジャパン」というNGOに入りました。そのインターン活動の一環としてケニアに一ヶ月間ほど行きました。大学に入ってからも国を跨いだ大きなイベント開催に携わるなど活動を続けていたので、忙しかったですね。



TICAD V 学生プロジェクトでの  
活動風景

# 信濃町キャンパスでの実習

——看護医療学部では、三年生になると実習がはじまるのですよね。

はい。通うキャンパスが湘南藤沢から信濃町に変わって、学事などの事務的な処理もすべて信濃町キャンパスで行われるようになります。信濃町にある慶應義塾大学病院の近くの小さな校舎が看護棟になっており、三年生の春学期はそのキャンパスで講義や演習を受けて、秋学期は病院で実習をしています。

実習は、患者さんの状態を知るというアセスメントからはじまり、その状態からどのように治療したらどんな結果が得られるかを考えることが主となります。どのように治療を展開していけばいいかということは一、二年生のときに講義などで勉強して、三年生の実習では、医師から病態学の講義を受けつつ、患者さんを対象に実際にどのような

看護が必要かを考えます。患者さんの個性に合わせて、その病態を知った上で医学的根拠をもとにどういった援助が必要かを考えていく形式です。

私たち実習生は、患者さんの体を拭いたり体位交換をしたりお話をしたりすることは行ってもいいのですが、点滴を打ってお薬を提供するといった行為は一切できません。基本的には、担当の看護師さんのもとでお手伝いできる範囲のことをやります。

指導をしてくれる看護師さんも厳しく接してくれるので、精神面でも鍛えられます。また、実習に入る前の三年生の春学期は限から六限まで病態についてみっちり学ぶのでヘトヘトでした。

また看護医療学部では、基本的に単位を落とした講義を再履修することができないので、常に緊張感がありました。もともと、同期全員が同じ状況なので、みんなで協力して勉強したりして固い結束が生まれていきます。

——学ぶためのモチベーションはどのように保っていたのですか？

私は看護師になりたいという明確な目標があったわけではないので、講義や実習をしていく上で「いまやっていることは将来に役立つのだろうか」と不安に思うこともありましたが、でも、それを通して人間を知ることができたと思っています。

看護学は人を知る学問だと思うので、将来の仕事に直結しなくても、どんな分野でも活かすことができると思います。どんな仕事についても、社会に出たら人と関わりながら何かをしていかなければなりません。人がどういうことに影響されて、どういうふうを考えていくのかというプロセスを学ぶことは決して無駄にはなりません。自分の想像力が豊かになれば、相手への理解がより深まって良い関係をつくることができる。そんなふうを考えていたので、モチベーションが下がることはあまりなかったですね。



信濃町キャンパスにて

## 4年生、そして就職

—— 四年生になるとどのよう  
なことをするのでしょいか。

キャンパスは信濃町から湘南藤沢へ戻ります。でも必修の講義はほとんどなくて、学生は国家試験のための準備期間として勉強しています。その間にプロジェクトという、

総合政策学部・環境情報学部  
で言う研究会（ゼミ）のよう  
な選択科目があります。私は  
情報リテラシーやコミュニ  
ケーションを専門とする宮川  
祥子先生（看護医療学部准教  
授）のもとで研究を進めてい  
ます。

医療や福祉など保健分野  
ではさまざまな職種の人が  
関わっていますが、それぞ  
れの職種が専門性を発揮する  
ために適切な情報共有が行わ  
れているのがこれからの問題  
になっていきます。ですから、  
私はどのような情報をいつ誰  
にどのタイミングで共有する  
ことが、効率的でより良いケ

アに繋がっていくのかを考えていま  
す。このテーマで卒業論文も執筆す  
るつもりです。プロジェクトを持つ  
ている先生はたくさんいて、がん、  
小児、助産などさまざまな分野があ  
り、学生がそれぞれの関心ある分野  
でプロジェクトに参加できる環境が  
整っています。

—— 看護医療学部の学生に対してア  
ドバイスをお願いします。

私自身IT系の企業に就職が決  
まったのですが、病院で働く看護師  
さん以外に、さまざまな進路に進む  
学生がたくさんいます。医療や看護  
の分野で、今までなかったことに挑  
戦しようとしている卒業生もたくさ  
んいます。看護師の知識や免許を持っ  
た人たちがさまざまな分野へ羽ばた  
いていくことで、従来の「看護」に  
対するイメージも塗り替えることが  
できるでしょう。慶應の看護医療学  
部生にはこれからもどんどんそうし  
たチャレンジを続けてほしいです。

TICAD V 学生プロジェクトにて



共に学んだ仲間たちと



## 看護医療学部のはじまり、これから ～看護一期生からの視点

看護医療学部が設置されてから14年。

一期生は看護医療学部で何を学び、今にどう活かしているのだろうか？

今回は卒業生である坪田康佑さんと高丸慶さんに語ってもらった。



### 坪田 康佑 (つばた・こうすけ)

2004年度卒業。「株式会社どこでも」代表取締役。医療過疎地区での診療所や訪問看護を設立、運営。日本男性看護師会の発起人も務める。

### 高丸 慶 (たかまる・けい)

2004年度卒業。看護師、保健師、居宅介護支援専門員として「株式会社ホスピタリティ・ワン」の代表取締役や一般社団法人訪問看護支援協会の代表理事、株式会社おくりびとアカデミー校長を務める。2015年中小企業基盤整備機構主催ジャパンベンチャーアワード審査員特別賞受賞、NEC 社会起業塾選出。



——おふたりはなぜ看護医療学部に進学しようと思われたのですか？

坪田康佑 (以下、坪田) …高校三年生の九月ごろ、看護医療学部という学部が湘南藤沢にできるという話を聞きました。僕は医療は絶対なくならないものだから、医療分野で食べていけたら一番安全だろうって思ってた、以前から医療分野に興味を持っていました。なかでも看護は開拓のしがいがある分野で可能性があると感じていました。あとは新設学部だったから先輩がいなし、新しいことに挑戦できると思っていたんですね (笑)。

高丸慶 (以下、高丸) …二〇〇一年に保健婦助産婦「看護婦」法が保健士助産師「看護師」法に変わり、男性も看護師になりやすい制度整備がされました。それまで慶應の看護学校は女性しか入れない短大だったのですが、この制度改正に合わせて新学部が設置されたのだと思います。僕もこの社会では将来的に病院の必要性が増すと考え、医療に興味を

持っていました。そのなかでも看護の領域を勉強して、その周辺でビジネスマンとして仕事をしたいなという思いがあつたんですね。ですから最初は経済学部に進もうかと思っていました。

坪田..そうしているときに慶應義塾高校の元校長であり看護医療学部の初代学部長である山崎元先生と面接する機会がありました。そのときに先生から、医療経済を勉強するために経済学部へ進むより、看護師の国家資格を持つている方が軸ができていいのではないかと言われたんですよ。病院で看護師になるという発想はなかったもので、新鮮でした。

高丸..背中を押してくれたのは、そのころに配られた『看護医療』への招待』（慶應義塾編、二〇〇〇年）という本です。「これからの看護医療学部はこんなことをやるんだ、だから看護医療学部は必要なんだ」ととてもキラキラしたイメージがあつて、これはおもしろそうだなと思えました。

——実際に進学してみてもうでしたか？

高丸..僕も坪田さんも慶應高校時代から体育会に所属していたんですよ。他の学部は体育会と両立できるので、看護医療学部でも両立できると思っていました。でも結果的に体育会を辞めざるをえなかった。体育会のない大学からやってきた先生がほとんどで、体育会を続けようとする、「あなたたちは看護師になるためにこの学部に来たんでしょう」と言われました。授業毎に出欠チェックもあつたので、両立は難しく他学部に進学していた先輩の話と違うなあと面食らいましたね。

坪田..僕は学部学則を全部読んで、事務室に「ここにこう書いてあるでしょう」と言つて単位や公欠をもらっていました。

高丸..そのとき藤沢市とSFCでe・ケアタウンプロジェクトというプロジェクトが立ち上がっていました。SFCの強みであるITをつ

かつたネットワークと看護の専門知識を掛け合わせて、藤沢市の高齢者を対象に遠隔医療を行うものです。そしてそのプロジェクトの一年目に僕たち一期生が関われるということですごく楽しみにしていました。

坪田..ITが最も浸透していなかった看護という分野に、ITが最も強く看護の知識もある慶應が開拓するというところに可能性を感じていました。最近SFCで学んだことを活用できたと思つているのは、自治会とのコミュニケーションやNPOなどのマネジメントに代表されるような、まちづくりの考え方です。SFCのまちづくり系の強さと先鋭的なITの可能性を掛け合わせたe・ケアタウンプロジェクトは本当に意味のあるものでした。国はいまだにこのことについて議論しているので、あのとき慶應でもつと議論が深められていれば、今ごろSFCがMITメディアラボと並んでいたかもしれないですね。僕も在学中に起業すると言いついていたかもしれない。

高丸..そのとき藤沢市とSFCでe・ケアタウンプロジェクトというプロジェクトが立ち上がっていました。SFCの強みであるITをつ

高丸..そもそも起業するという発想が看護医療学部にはありませんでした。慶應義塾大学病院に進むことが目標という空気があつたんです。慶應の看護が短大のときから学生のほとんどが看護師として病院に就職していました。ところが僕たち一期生の半分は一般企業に就職していたし、僕たち二人とも一般企業に進んだので、驚いた先生もいたと思いますよ。

——進学して、看護分野への考え方は変わりましたか？

高丸..看護師の仕事って、病院で患者さんを見るだけでなく病院のマネジメントもありますよね。患者さん、病棟、病院、地域、そして国を見る役目があると思つているんですよ。実際に看護医療学部のOBで看護師から国会議員になった人もいます。坪田さんはMBA（大学院の経営学修士資格）を取得しているのですが、たとえば経済学部を卒業してMBAをとつている人はいても、看護師免許を持ちながらMBAを取った人は

ほとんどいなかった。一期生でMBAを取得しているのは坪田さんだけ、オンリーワンなんです。

坪田・看護の現場の人たちから見ると異色と言われるのですが、看護師免許をもっていると他の業界とコラボレーションがしやすいんです。看護というコンテンツが社会に広く求められていることを感じます。

高丸・資格を取るだけだったら専門学校に行ったほうが一年早くすむし、実習経験も多くあったほうがいいでしょう。ですから、慶應で四年以上かけて看護資格を取るとは、それとはまた違う意味があると思うんです。

坪田・どうして慶應が看護医療学部をつくったかというと、看護の分野が病院色に染まらないようにするためにですよ。慶應ならではの人的ネットワークを構築すること、なおかつリーダーシップを持った先導者を育成することの二つを重要視しているように思います。

高丸・先導者って、人からあつちに進みなさいと言われて進むというより、自分が思った方向へ進む人が多いですよ。また、ルールの上をただ乗っかるっていうのは本来のSFCぽくない。大学生なんだから自分で情報を集めて取捨選択すればいい。それこそ自立の精神を試されていたように感じます。

——進学して良かったと思うことはなんですか？

高丸・国家資格を取らずに医療行為をすると法律違反になります。しかも受験資格は指定された学校に通わないと得られません。ヘルスケアの領域が儲かると思っても、資格がなければ参入は難しい。人口が増えるところに必ず市場が生まれるので、ヘルスケアは確実に需要のある領域だろうと思います。その意味で、看護医療学部は可能性のある学部だと思っています。

坪田・あと看護医療と慶應の二つの肩書きがあると誰にでも会いにいけ

ますね。僕は学生時代に髪を金髪にしたまま厚生労働省の検討会を聞きに行きました。そうすると向こうが変な学生がいたと覚えてくれて、卒業後に次官と再会することもありました。もう一つ、男という要素もありますね。看護の分野には男子学生が少ないから、目立ちます。

高丸・尖っているものが一つだけだと弱いですけど、たくさんあると誰も追いつけなくなる。慶應の看護はそうした要素を持っていると思います。

看護の男性は少ないですが、自分はそのような環境で良かったと思っています。与えられた環境のなかで自分がどう生き残るかを考えてアイデンティティをつくりだす訓練は、社会に出てからとても役に立ちます。起業した後の試行錯誤と、看護医療学部の一期生のときの試行錯誤はとても似ていました。今となってはその試行錯誤もすごく良い経験です。悩まなかったら思考が終ってしまいますからね。

ですから、みなさんにも今の状況

に安住しないでほしいし、自分たちがマイノリティであつても、その道をとことん進んでほしい。突き進んでいけば、勝手にチャンスが舞い込んで来ます。

坪田・先導者って疲れるし、挫折するときもあります。でも今の看護医療学部生は、僕たちと違って先輩がいるわけだから、僕たちみたいな先輩を使ってほしいですね。



## 誕生！ 湘南藤沢記念病院

2017年秋、藤沢の遠藤地区に湘南藤沢記念病院がオープンする。

藤沢市北部地域医療の核ともなるこの病院は、SFC とどのように関わってくるのだろうか。

SFC 事務室の総務担当である矢ノ目優さんにお話を聞いた。

——ここ、遠藤地区に湘南藤沢記念病院が建設される経緯を教えてください。

もともと幾つかの大きな都市基盤の整備のなかで藤沢市が、このエリアに「健康と文化の森」という構想をつくったんです。文化の森の主役がSFCで、健康の森の主役は、看護医療学部でありこの病院です。この二つが合わさって健康と文化の森という発想なんです。

藤沢市は、健康の森を市の北部地域で先進医療を提供できる場所にしたと考えていました。しかしなかなか実現せず、病院計画は白紙のままでした。

しばらく経って、二〇一三年に、神奈川県医療政策指針となる保健医療計画の改正案のなかで、藤沢市を含む湘南東部の病床数が足りない指摘されました。この地域にできるだけ早く病院をつくらなければいけない状況が生まれ、慶應義塾からも関連のある人材を紹介し、建設する運びになりました。

それで、慶應義塾大学病院の医局

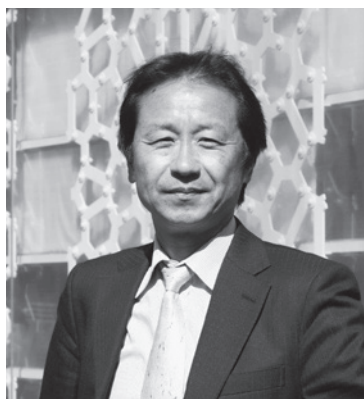
にいた医師の協力もあつて、病院建設が本格化することになりました。病院開設の中心となったのは、医療法人社団の健育会です。健育会からは臨床応用・医療サービスを提供し、SFCは基礎研究・応用研究を行うという役割になっています。

——SFCとの連携はどのようなものになるのでしょうか。

病院のなかに連携スペースができて、それをSFCも使用するという予定のようです。この場所はあくまでも研究のための場所であり、医療を専門とする医学部と連携する場所ではないということです。もちろん、医学部も若干は関与するかもしれませんが、あくまでSFCのさまざまな研究に使われることになってくるでしょう。

いま現在、健康長寿を目指す「抗加齢医学」や、病気になる前段階の状態を改善する「未病」の分野での連携が行われます。患者さんのデータを集積して、ビッグデータとして利用させていただくという話もある

がついています。SFCの強みであるIT分野も活用できそうですね。病院は二〇一七年の秋に完成予定ですが、実際に研究がはじまると、さらにコラボレーションの仕方が変わってくると思います。SFCの多様性を活かして、おもしろいものをつくりあげてほしいですね。



矢ノ目 優  
(やのめ・まさる)

湘南藤沢事務室総務担当課長

## 施設紹介

## 小さな図書室の大きなサービス

赤堀美和子さん（湘南藤沢メディアセンター職員）の  
勤務する看護医療学図書室は看護医療学部校舎の2階奥にある。

総環エリアにあるSFCメディアセンターのように建物が独立しているわけではなく、  
校舎内の一室にあるこぢんまりとした図書室である。しかし、あなどってはいけない。  
他のキャンパスからの図書の取り寄せ、文献複写サービス、豊富な電子ブックや電子ジャーナル。  
目に見える小さな図書室の背後に、実は大量の蔵書が控えているのだ。

——置いてある蔵書は、やはり看護  
や医療に関するものが多いのでしょ  
うか？

そうですね。蔵書のほとんどが看護学や医療、健康科学に関するもの、もしくは大学院の健康マネジメント研究科のスポーツマネジメント専修で扱うスポーツに関する本です。本だけでなくDVDなどの映像資料も置いてあります。映像資料は講義などでよく利用されていますが、映画などと比べて値段が高いため、できるだけ先生方や学生さんたちが共同で利用できるよう積極的に購入しています。

医学部と看護医療学部三年生、健康マネジメント研究科の講義も行われる信濃町キャンパスのメディアセンターとは蔵書の分野が共通で同じ資料もありますが、ここの図書室ではできる限り最新版を置くようにしています。看護の技術はどんどん進歩していくので、本の内容もどんどん更新されていくんです。看護医療学部の学生さんは、卒業後は大部分が医療現場での仕事に就きます。そ

ここでは技術だけでなく薬や、医療器具もどんどん更新されていくわけですから、学生のうちからできるだけ新しい情報をキャッチアップしてほしいんです。

——最新の本が揃っているというの  
は利用者からするとうれしいです  
ね。必要な本が探しやすそうです。

以前は蔵書が多いことがいいことだという考え方もあったようでしたが、現在の図書館では使いやすさも重要視されており、ここでもそのことを常に意識して資料を収集しています。

しかし、大きな本屋さんにもないようなマイナーな雑誌や古い本もどこの図書館にはなければいけません。看護医療の分野でも、国内の複数の図書館が、ある海外の雑誌との契約を中止してしまったために、日本でのその雑誌を読むことができなくなったことがあったという話を聞いています。マイナーな雑誌や、古い本を保管する、残していくというのが図書館の重要な役割です。

幸いにも慶應の信濃町キャンパスには、国内に数ある医学図書館のなかでも有数の蔵書量を誇るメディアセンターがありますから、本を残していくという機能はそちらにお任せしています。ここは他のキャンパスにあるメディアセンターに比べるとスペースが小さいので、その分、新陳代謝をあげて最新のものを扱うことにしています。

——雑誌も多いようですね。

看護医療の分野では雑誌は重要な情報源です。最新の情報は本ではなく、まず雑誌に載るので、ここでも特に収集に力を入れています。看護医療学分野の学会は数多くあり、それぞれが学会誌を出版しているので、それらもできる限り収集するようにしています。もちろん限界はあるので、入手できないものは他の図書館から必要な論文のコピーを取り寄せる文献複写サービスを提供しています。たとえば塾内のメディアセンターからだとかピー一枚につき十円で取り寄せることができます。

外国の雑誌については最近ほとんどが電子化されているので紙の雑誌は置かず、利用者には電子ジャーナルで読んでいただくことにしています。そうはいつても、本一冊をパソコン上で読むのは大変なので電子ブックの購入については慎重に検討していますが、最近、新しい内容のタイトルが増えているのを見ると、今後も電子化がますます拡大していくと思います。

在学期間中は紙の本や雑誌だけでなく、さまざまな電子リソースを自由に使うことができるので、みなさん使わないともったいないですよ。

——他の分野の本は置かないのですか？

この図書室が開設された二〇〇一年当時は他の分野の本もいろいろ収集していたのですが、今ではILL (Interlibrary Loan) という慶應義塾の六つのキャンパスのメディアセンターが所有している蔵書を取り寄せるシステムで、在学中は簡単に本の取り寄せができます。ですから、

こちらの校舎で開講されているカリキュラムに直接関係のない分野は他のメディアセンターにお任せして、私たちはできるだけ看護医療学分野の資料の収集に責任を持つようになっています。

——学生たちはここをどのように利用しているのでしょうか。

自習室として使っている人が多いですね。校舎一階の食堂ではみんなで食べたり、おしゃべりしながら勉強して、ここでは一人で静かに勉強するというふうに使っているようです。SFCメディアセンター(M館)は学生同士のコミュニケーションや憩いの場としても使われているので結構にぎやかなようですが、ここは本当に静かです。

学生がこの図書室をよく使うのはレポートなどの課題が出たときです。教科書は各自が必要なものを購入していると思いますが、当図書室ではシラバスに掲載されている教科書は最低二冊入手し、そのうちの一冊は図書室内でいつでも利用でき

るように館外貸出禁止にしています。

看護学には母性看護学や小児看護学などいろいろな領域があるので、レポートで必要とされる本もさまざまです。どの領域でも看護学に関する本ならばできるだけ入手するようにしています。新しさだけでなく、分野を網羅することもこの図書室の仕事だと思っています。



赤堀 美和子

(あかほり・みわこ)

湘南藤沢メディアセンター

看護医療学図書室担当事務員 (主務)

sfcism

vol.08

SFCの卒業生や現役の学生のなかには、知る人ぞ知る人がいる。  
このコーナーでは、ユニークな活動をしている卒業生や学生を特集する。  
今回は、NPO法人フローレンス代表理事の駒崎弘樹さんにお話を聞いた。



駒崎 弘樹

(こまざき・ひろき)

総合政策学部 2003 年度卒業  
病児保育、小規模保育、障害児保育に関するNPO法人フローレンス代表理事

——どのような学部生時代を過ごしていたのですか。

僕は一九九九年に入学しました。高校生のときには国際関係の勉強がしたかったんです。それで、SFCはキャンパス名がアルファベットだから国際的な学びができるのではないかと思ったんですね。でも、通いはじめると全然国際的ではなかった(笑)。最初は自分が学びたいものが学べないのかもしれないと不安になりましたが、学生がとてもおもしろくて、一気にSFCのことが好きになりました。

一年生のときにサークルを立ち上げました。SFC映画研究会MOVIE(ムーブ)というものです。このサークルは最初四、五人で立ち上げたのですが、一、二年後には百人くらいの方がいる大きなサークルになりました。ここでは脚本を書いたり役者になったりして舞台をつくっていました。

同じ時期に、小さなコンサルティング会社からインターンのお誘いを受けました。話を聞いていただくとおもしろそうだったので、そちらで働くことにしました。仕事はカフェのコンサルです。コンサルといってもまだ学生ですので、前段階の調査の部分を行いました。いまでこそ街中にたくさんカフェがありますけど、当時は喫茶店と呼ばれていて、今のよなものには少なかつたんです。

それが二〇〇一年に『東京カフェマニア』(川口葉子、情報センター出版局)という本が出版されて、カフェブームが起きました。東京に雨後の筍のようにいまの形態のカフェができていったんですね。たくさんのカフェをしらみつぶしに調査していました。訪れたカフェはどれも素敵でした。

そこで、店長さんやオーナーさんにお話を伺うと、驚いたことに二十代の方ばかり。自分とほとんど変わらない年齢の人たちがこんな素敵な空間をつくりあげていることにすごいなと思つたんです。

それまでの自分は、大学を卒業して大きな会社に入社して、出世すること大きなビジネスができるのだとばかり思っていたのですけれど、

どうやら違うんじゃないかと考えるようになりました。

一方で、社長に連れられて一部上場企業の取締役とご飯を食べに行ったりすると、そこでの話題は小泉改革だったり、抽象的な話だったり、必ずしも仕事に直接関係のないことでした。それを聞いて、自分はどちらの生き方をしていきたいかと考えたとき、実際の現場で働く仕事をしたいと思うようになりました。この経験は自分の職業観に大きく影響を与えています。

そうこうしているうちに、大学三年生です。ITに詳しい後輩から「先輩、ちよつと社長になつてもらえませんか」と言われたんですね。どうやらその後輩がやっている学生ベンチャーに営業や経営を担う人材が足りなかつたようで声がかかりました。たまたま僕はサークルをつくつたり、コンサルの仕事をしていたので、後輩は僕にそうしたスキルがあるのだと勘違いしたのでしよう。

結局、そのニューロンというIT会社に二年間社長として携わりました。当時はウェブサイトをつくるだけでもいいお金になりました。一件につき二百万くらい貰えたので学生だけで数千万の売り上げを出すことができました。この会社で初めて経営に携わつたんですけど、お金も稼げるし、普通に大企業で働く大人たちと共に働けるというのは純粋に楽しかつたですね。

ただ、会社の経営をするなかで、本当にしたいことが少しずつわからなくなつてきました。ITベンチャーの仕事はとても楽しかつたのですが、本当にこれが自分のやりたいことなのかと迷つていたからです。当時、IT業界はバブル状態でしたから、割とすぐに上場して、利益をあげて六本木ヒルズに住むというのが珍しくありませんでした。でも、利益や成功のためだけにやるのは意味がないなと感じていたので、「ITで世界を変える」と言つてくれるけれど、どれくらいの意味があるんだろうかと。本当に大切なことはなんだろうと思つたときに、自分はやつぱり人の役に立つことをしたいんだと気がきました。社会の問題を解決して本

当に困っている人の役に立ちたいと



思ったんです。

どうやったら役に立てるのか考えていたところ、ベビーシッターをしている私の母親から聞いた話を思い出しました。利用者の方に二人の女の子を抱える会社勤めのお母さんがいらして、子どもを保育園に通わせていました。保育園では子どもに37・5℃以上の発熱があると預かってくれないんですね。ある日、子どもが37・5℃以上の熱をだしたのでお母さんは会社を休んで看病することになりました。子どもはお互いに病気をうつしあってしまつて、お母さんは割と長い間会社を休まざるを得なくなりました。そうしたら会社が怒つて、そのお母さんは会社を辞めさせられたというのです。

そこでNPO法人を立ち上げようと思いました。十数年前の日本でNPOというと、ボランティアで炊き出しをしているイメージだけだったのですが、海外を見ると、しっかり運営してお金を稼いで継続しているところがたくさんありました。そのようにソーシャルビジネスの形で社会の課題を解決していくことが本来のNPOのあり方でしょう。そうした理念のもと、フロレンスを立ち上げました。

——SFCではどのような勉強をしていましたか。

研究会は経営学が専門の榊原清則先生（元総合政策学部教授）のもとで学んでいました。経営学のなかでも特に戦略論の分野で本当に素晴らしい方で、僕は研究会の代表をやっていました。先生はおもしろい方で、教え子が大企業に入ると鼻で笑うんですね。まったくリスクをかけずに行動することを良しとしなかったんです。大企業に入ること自体は誰でもできることだし、もし君が本当に

優秀だったら社会のために起業しようよと言う先生でした。当時、そのようなことを言う教員はあまりいませんでした。

ITベンチャーの社長をすること、先生に報告するとすごく喜んでくれて、「リスクをかけて戦うなんて、お前は本当に素晴らしいよ」と褒めてくれました。僕が湘南台で運営していたルームシェアにも一部屋を借りてくれていました。いまから思えば先生なりの援助だと思えます。身銭を切つて学生を支えてくれるという教員はなかなかないですよ。とても助かりました。

——SFC生にメッセージをお願いします。

みなさんが思っている以上に学部間の四年間はあつという間で貴重な時間です。社会に出て初めて気付くと思うのですが、その四年間で自分の価値観が形成されるし、自分の人生の指針が立つんです。ですから、一日一日、宝物のような時間を無駄にしないでほしいと思います。

その時間の過ごし方はさまざまでしょう。たくさんの本を読むのでもいいし、人からみたらとんでもないようなことをするもいい。何でもいから自分の枠を広げていくことに投資してほしいです。僕も分相応にITベンチャーの経営をして、当時はものすごく背伸びをしていました。でも、あの経験がなければ経営者としての自分は存在しないと思つています。

SFC生つて、世間から「意識高い系」だと揶揄されたり嘲笑の対象になったりしますけれど、勝手に笑わせとけばいいんですよ。そんなことに萎縮する必要はなくて、みんなが「あいつまた変なことやってるな」と思うようなことにむしろ積極的に取り組んで、燃え尽きてほしい。当時僕もいろんなことを言われました。入学した当初も、SFCの奴らは社会では使えないと言われていました。でも、それから十数年経つてみて、社会の方が僕たちより使えないことがわかった。皆さんは、気にしないで社会の先端を走り続けてほしいと思います。

# ようこそ、新任教授

毎年、SFCにはさまざまな分野の教員が着任する。

新たにSFCにやってきたのはどのような教員だろうか。

今号では、ランドスケープアーキテクチャを専門とする石川初政策・メディア研究科教授と

国際金融や計量経済学を研究している和田龍磨総合政策学部准教授にお話を聞いた。



石川 初

(いしかわ・はじめ)

政策・メディア研究科教授

専門はランドスケープアーキテクチャ、地理教育

—ご経歴を教えてください。

大学では農学部造園学科に在学し、意匠系の勉強をしていました。大学に入る前から、国立公園や農村などの自然環境と絵を描くことの両方に興味があつたので、どちらも学べそうな農学部造園学科に進学を決めました。

大学を卒業した後は、大手ゼネコンの設計部やランドスケープの設計事務所で働いていました。ランドスケープという言葉は非常に広い意味で使われていますが、私は建築や都市開発の際につくられる緑地や公園や道路などの外部空間のデザインと設計をしていました。

こういう仕事をしていると、関連する周辺領域にも興味が湧いてきて、設計だけでなく、研究や表現活動を行うようになりました。そうしているうちに縁がながつて、本を書く機会や大学で教える機会もあつたり、講演をさせてもらっていました。

このような、ランドスケープから少しはみ出した活動を見てくださ

ていたのでしょうか、SFCの教員公募に出してみないかとお誘いいただきました。今年の四月から本校の教員となりました。現在はSFCの教員職以外に兼職せず、研究と教育に専念しています。

—SFCで教員になることに関して何か葛藤などはなかったのでしょうか。

正直なところ設計の仕事はすごく楽しかったのですが、あのまま続けても不満はなかったと思います。しかし、今回の公募の件や、今までの非常勤講師の仕事もそうでしたが、機会というのは与えられるものなので、いただいたお話は断らないというポリシーに基づいて決断しました。

私自身にとっても大きな決断でしたが、これまで十年ほど武蔵野美術大学や千葉大学で講師として仕事をしながら、教えることや学生と一緒に何かをやることに喜びを感じていました。講義をするためには自分も勉強をしなければならぬので、結果的に私にとっても非常に大きな

学びになっていきます。ですから、いきなりまったく関係ないキャリアから大学の教員になったというよりは、少しずつ今のキャリアに移ってきたような印象を持っています。

——現在、どのような研究を行っているのでしょうか。

もともと、大学でやりたかったことは、都市を含めた環境で生活している自分たちと、その自分たちを支える環境との関係を認知する方法を探ることでした。既存の言葉でこの概念を上手に表現することができなかったので「地上学への研究」というテーマを設定しています。具体的には、人が今どこにいて、どこに向かっているのかを可視化して表現にするといった研究と既存のランドスケープデザイン分野のスキルや思想をどのように融合させるかといったことをメインの活動として行っています。

今後やっていきたいのは、現在着手しつつある都市においての移動と行動を社会学と地理学のアプローチ

から読み解くような研究と、ランドスケープデザインにおける方法と思想をデザイン的な文脈に応用できるか研究することです。

以前から、デザインという言葉はもう少し厳密な、しかし広い意味で使われなければならないと思ひ、モノの形態を決めるという意味だけに使われることに違和感を覚えていました。もつと広い意味でデザインという言葉が使われると良いのではないのでしょうか。

最近では一般の人からも工場景観や土木景観が注目されていますが、新しい風景を発見したり、通常愛でる対象でなかったものを美しいものとして見いだすということも、とても重要なデザインのひとつだと思います。

現在、私は政策・メディア研究科のxDesignプログラムにも所属していますが、それは分野を越境するという立場にいたいという思いがあるからです。もともとランドスケープという分野も、それ自体になにかデザインされるべき対象があるというよりも、前提としてたとえば建築

があつて、その周りにあるさまざまなモノと建築の関係性をどう組み立てていくかにフォーカスを当てる分野です。だから、私自身もこれまで以上に既存領域に囚われずに研究をしていきたいです。

——SFCにどのような印象を持っていますか。

SFCには他と比べにくい特徴があると思います。その一つはキャンパスが非常に特徴的であることです。遠藤の風景との良い意味でのミスマッチがありますし、地図を見ても一発でSFCだとわかります。

春学期の研究会の活動として、パインレットやウェブ上に掲載されていたSFCのキャンパスマップを集めてみたのですが、キャンパスそのものがSFCを象徴するものとして扱われることが多いことがわかりました。他の大学ではキャンパスマップがその大学を象徴するという例はあまりありません。SFCらしさの一つはキャンパスの地図にあるようです。キャンパスが持っている記号

性の強さというのが、我々に強く影響を与えていると思います。

もう一つ強く思ったのは、このキャンパスには「説明しにくい」というおもしろさがあるということですね。なぜ、湘南の地に慶應のキャンパスがあるのかという疑問に答えることから始まり、何を教えているのか、何を研究しているのかと次々に説明していかなければなりません。私自身もSFCに入ってから初めてここには研究会ごとに独立した私塾のギルドのような要素があることがわかりました。

SFCではジャンルを学ぶ作法があるわけでも、偉い先生の下にヒエラルキーが構築されているわけでもないのに、教員自身が何をどこまで教えていけば良いのかを模索する必要があります。このことはSFC外の人に説明するのは難しいのですが、一言で説明できないこと自体が最近ではおもしろくなってきました。SFCならではの、です。

## ようこそ、新任教授

— SFCの学生に対して何かメッセージはありますか。

SFCの学生は良くも悪くも、クレーバーにいろいろなことを乗り越えているような印象を持ちます。二手、三手先を読んで行動をしているのではないのでしょうか。もちろんそのクレーバーさが評価される場面も大いにあるのだけれども、もつと愚直に、先回りをせずに全力で何かにぶつかってみてほしいですね。

私が研究会で繰り返し言っているのが、「愚直に」「執拗に」「丁寧に」の三つなのです。その三つを表現するためによく行っているのは「地図にする」ことです。多くの場合、地図をつくっている最中は、完成したときにどうなるかなど予想がつきません。しかし、さまざまな情報をマッピングしてできた地図を眺めていると、そこから今まで見たこともなかったような世界の像を発見することができるようになります。

一方で、おもしろい地図を描こうとして描きはじめると、作りの妙な手心が加わってしまつて、できあ

がった地図はおもしろくありません。その時々にしなければならぬ作業に集中することでマッピングされた物のクオリティも上がり、そこから今まで見たことのないものを読み取ることができるようになるんです。

地図も人生も同じです。目の前の問題に全身全霊で取り組み、その取り組みを誰かに伝えるときには、丁寧に相手に伝わる形式で出すということ、これが大事なだろうと思います。



### 和田 龍磨

(わだ・たつま)

総合政策学部准教授

専門は国際金融、計量経済学

— まず、ご経歴を教えてください。

高校はSFC高校に通っていて、私の代は一期生でした。そこから慶應義塾大学の経済学部へ進み、そのまま大学院へ進学し二〇〇一年に修士課程を修了しました。二〇〇一年から二〇〇六年までボストン大学へ留学して学位をとり、その後約八年ほどアメリカとカナダで教員をしていました。そして、二〇一五年に総合政策学部へ准教授として着任しました。SFCキャンパスへは二十年前りに帰ってきたということになります。

SFCで教える際には、北米の大学の講義と同じようなやり方で教えることを心がけています。そのような講義を受けることは、留学を考えている学生には役立つかもしれません。留学すると、日本では得られなかった気づきを得ることができると思います。そして、世界がものすごく速いで動いているということもわかると思います。たとえば、日本は現在人口減少もあつて経済が停滞しています。アメリカ経済は加速し

ている。留学をした学生はこのままではいけないと危機感を持つようになるのではないだろうか。

——研究会ではどのようなことをされているのですか。

私に通っていた三田キャンパスでは、一、二年生のうちに基礎を身に付け、三、四年生から研究会に入るというものでしたので、SFCの研究会とは違う形式なのだと意識していました。実際にどのようなことをするかなどはいまだ試行錯誤の繰り返しです。幸いにして、やる気のあつた学生が集まってきて楽しくやっています。

基本的には英語のテキストを輪読しています。内容としてはマクロ経済学や国際金融論などです。それと並行して個人またはグループで、自分の好きなトピックについてリサーチしています。たとえばGDPと自殺率の関係や各国の年金制度の比較、オリンピックの経済効果などです。それ以外にも計量経済学などの手法を使い、学部で学ぶこと以上の

ことを研究している学生もいて、先学期はなかなかおもしろいものがありました。

学生との関わりも積極的に持つようにはしています。週に一回の研究会のあとには学生と一緒に食事に行くこともあり、先学期には個人面談をしました。個人面談では学生が今までどんなことを勉強してきたのか、どんなことを研究したいかなどを聞いています。その面談のなかで多かつたのは、もつと基本的なことを勉強したいという声です。それについては夏休み期間に指定図書を提示していました。それをふまえて今学期以降は必要に応じてレクチャーをしていこうと考えています。

また、サブゼミという形式のもと、学生同士で基礎固めをしたいという声もあつたので、それも反映させようと思っています。理論に興味がある学生もいれば、政策などの実践に関心のある学生もいてさまざまですが、共通しているのはやはり基礎を勉強したいということでした。SFCには経済学を学ぶ機会が少ないの

で、学生もそう思うのかもしれないね。

学生の正直な声を聞いて、経済学への意欲があることがわかって私としてもよかつたです。私にできるのは彼らに学問的な知識やスキルを与えることだと思つたので、今後は研究会や講義などで対応を考えていきたいと思つています。

——経済学のどこに魅力を感じますか。

世の中の出来事を、こういう理由があるからこういう結果になつたのだと理屈で説明することができるところです。

たとえば、私が学生のときは先生たちに学生が勉強しないと聞かれていたのですが、学生からしたら、勉強したからいいことがあると思うから勉強すると考えているんですね。勉強したから良い成績がとれる、そして良い成績がとれたら何か良いことが起こるといのが彼らにとつてのインセンティブなんです。もちろん、学ぶ内容を好きになつてくれて

自発的に勉強するようになってくれるのが一番なのですが、日本の大学では長らく勉強することにインセンティブは必要ない、学問は学問としてやらなければならないという考えがありました。その考え方は研究者としては良いのかもしれないですが、学生としては何らかのインセンティブを与えた方がいいのかなと思います。

このインセンティブというのはモノをあげるといふような短期的、短期的なものではなく、成功した人の話などから、将来のために勉強することがどのように役立つのかをわかつてもらふということなのかもしれません。カリキュラムを作るといふのはそのような、何らかのインセンティブを与えることを考えなければならぬわけで、そういうところはある意味経済学的な考え方です。私はインセンティブがないと勉強しないのは当然だとは思いませんが、人間の行動はインセンティブにある程度突き動かされていますから、学生が勉強しないからと言って彼らを責めることはできないと思います

ね。そして最終的にはやはり、その学びの内容を好きになつてもらいたいと思います。

経済学のおもしろいところは他にもあります。データを使って分析していると思ってもよらないような結果が出ることもあり、研究としてはものすごくおもしろいですね。本当にびつくりするような結果というのはそうそう出てこないのですが、それでも既存の研究とは違う結果が出ることもいくつかあります。

— SFCの印象はどうですか。

今まではSFCを外から眺めているだけだったのですが、そのときの印象は非常に変わった学部だなというものでした。外からみると何をやっていいのかよくわからない。ただ実際に来てみると、良い意味で予想を裏切られました。学生たちも、研究会に来ている学生に限らずとも学習意欲があつたので、研究会や講義は非常にやりやすかつたですね。

意外に思ったのは、どの方向性に

進めばいいのかわからない二年生や三年生が多いことです。いろいろな科目を履修しても、どのような進路へ進むか決めかねている学生が多く、たとえば私が教えている一部の学生も、経済学をこのまま学び続けているのかと漏らしています。SFCでは学問を深められないということではなく、学び続けた先に何があるのか見えない状況にあるのだと思います。ある程度彼らの道筋を示すのも自分の役割かもしれないという気がしています。

— SFC生にメッセージをお願いします。

大学生のうちに学んでほしいことは、学びには際限がないということ。学んでいくことによつて得られるものはいろいろとあるわけです。試験を受けたら終わり、卒業したら終わりではなく、自分の中でインセンティブを見つけ出し、学び続ける姿勢を持ち続けてほしいなと思います。視野を広げるために留学をするのもよいかもしれないですね。

海外に身を置くことで日本を相対的に見るができると思います。

また慶應の学生なんですから、大學生のうちに『学問のすゝめ』くらいは読んだほうがいいと思います。ただ、『学問のすゝめ』に書いてある内容は、それこそ海外に行かなければ、福澤諭吉が言いたかつたことを理解できないと思います。

この本で福澤諭吉は、国が独立するためにはまず人々が独立しなければならぬと言っています。まずは自分が成り立たないと他の人に依存することになってしまうし、そうすると国どころか組織も独立できません。人に世話をするのは素晴らしいという考えもありますが、まずは自分のことは自分でできるようにするのが非常に大事なのです。独立自尊というのはそのから来ているのだと思います。独立心がない人は他人に頼ることを考えて、みんなのことを考えられませんか。そういうことを含めて一度読んでみるといい書物だと思います。

この本がきっかけで、独立とは何かということを学部生の間に考え

て、自分の根底においてもらいたいと思います。今の学生は私が学生のころより大変で、かつての我々みたいに楽天的ではいられないでしょうが、頑張ってもらいたいなと思います。

# おとなりの研究会

さまざまな分野の学問が学べるSFCにおいて、研究会（ゼミ）はカリキュラムの中心だ。学生は授業で幅広く諸学問に触れ、そして研究会でそれを掘り下げる。当然、学生にとって研究会選びは自分の方向性の選択に他ならず、非常に重要だ。この連載では、数多いSFCの研究会のうちから二つを取り上げ、各担当教員にどんな狙いを持って研究会を運営しているのかを聞いていく。



井庭 崇  
(いば・たかし)

総合政策学部准教授  
専門はパターン・ランゲージ、社会システム理論

——どのような研究をしているのですか。

何かをつくったり実践したりするときの秘訣を言語化する「パターン・ランゲージ」という方法を研究していて、実際にいろいろな領域でパターン・ランゲージを作成しています。パターン・ランゲージの具体例としてSFCで最も知られているのは「ラーニング・パターン」だと思います。これは学び方の秘訣を四十個のパターンにまとめたもので、

方をまとめたパターン・ランゲージなどもつくってきました。

いま研究会では七つのプロジェクトが進行しています。それぞれが四人から六人くらいのメンバーで構成されています。どんなテーマのプロジェクトがあるかというと、新しい教育プログラムのデザインや、持続可能な生き方などです。パターン・ランゲージをつくるためのパターン・ランゲージをつくる、というメタなプロジェクトもあります。

二〇〇八年に井庭研の学生たちとつくりました。ラーニング・パターンの冊子は全SFC生に配布されていて、一年生向けの「総合政策学」や「環境情報学」の授業では、ラーニング・パターンを用いて自分たちの学びの経験を語り合う「学びの対話」ワークショップも実施しています。

——どのように研究を進めているのでしょうか。

今年で五年目なので、約四千五百人の在学生・卒業生がラーニング・パターンに触れていることになりました。他には、プレゼンテーションの仕方や、グループワークやプロジェクトなどのコラボレーションのやり

基本的には一年間でひとつのパターン・ランゲージをつくり上げるといいうプロジェクトに取り組んでいます。どのようなテーマのものをつくるのかは、僕がいま重要だと感じていることや、メンバーがやりたいと思っていることを研究として成り立つようにアレンジして設定します。どのプロジェクトも内容か方法の面で、世界で初めての試みになるようにしているのです、しっかり取り組む

ことで、必ずフロンティアを開拓したオリジナルな成果になります。こうして生まれたプロジェクトで、メンバーと一緒にとことん考え抜き、徹底的に話し合い、つくり込んでいきます。

研究はプロジェクトベースでやっていて、いわゆる「個人研究」は行っていないません。一人で取り組むのではなく、他の人と一緒にプロジェクトに取り組み、最良の結果を生み出すことを目指します。だから四年生も

「卒業論文」に取り組むというよりも、「卒業プロジェクト」に取り組むという感じになります。最後に取り組んだプロジェクトで論文を書く人もいるし、これまで数年間に生み出した成果のポートフォリオを提出する人もいます。卒業のときに何をどうまとめるのかは、各自のやりたいうようにやるのがよいと考えています。

——パターン・ランゲージはどのようにつくられるのでしょうか。

まず、その領域における秘訣を掘

り起こすために、経験者にインタビューをしたり、自分たちの経験を振り返って徹底的に話し合ったりします。そうやって掘り起こした要素を集め、近いもの同士を寄せていき、共通パターンを見いだします。そしてそれを、どういう「状況」のときにどういう「問題」が起きやすく、それはどう「解決」したらよいか、という形式の文章で表現し、みんなでも何度も話し合って修正していきま

す。パターン・ランゲージを共有するための道具、たとえば冊子やカードも製作しなければなりません。それだけでなく、そのパターン・ランゲージを活用する機会、たとえば、対話の場をつくるためにワークショップを行ったりします。

プロジェクトによつては、企業と共同研究として行っているものもあります。たとえば、料理レシピサイトを運営しているクックパッド株式会社と、料理のパターン・ランゲージについての共同研究をしているのですが、そういうプロジェクトではさらに井庭研の得意なこととその企

業の得意なことを組み合わせるときにどのようなことができるのか、ということも探究していきます。

井庭研の大きな特徴に、学部生たちが国際学会でたくさん論文を発表しているということがあります。学部二年生や三年生でも論文を書いて発表しています。つい先日でも十五人くらいでオーストリアとドイツに学会出張に行き、何本も論文を発表し、ワークショップを実施してきました。こういうことができるのも、すべてのプロジェクトが世界で初めてのことに取り組んでいることと、

それぞれのメンバーが「得意の持ち寄り」をして力を合わせて成果を生み出すというスタイルだからです。

——パターン・ランゲージを研究しはじめたのはいつからですか。

パターン・ランゲージについて知ったのは、いまから十五年くらい前だと思えます。本格的にパターン・ランゲージの作成・研究に取り組んだのは、二〇〇八年に、ラーニング・パターンをつくったときのこと

です。それ以降は毎年いくつもパターン・ランゲージを作成し、いまでは二十種類以上のパターン・ランゲージで、五百パターン以上を書いてきました。

パターン・ランゲージに出会う前は、複雑系の研究をしていました。生命や知能や社会など従来の科学では捉えきれない複雑なシステムについて研究する学問です。そこで求められたのは、複雑な現象の本質を捉え、抽象化して理解するということでした。パターン・ランゲージで求められるのも、まさにそのような力です。なので、一見すると全く異なる分野なのですが、本質的には通じていると思っています。

いまのパターン・ランゲージの研究につながる、もうひとつの伏線があります。僕は中学、高校、大学と、ずっと映画監督・映像作家になりたいて思っていました。どうということろに惹かれていたのかというと、世界の一部を表した映像作品によって、それを観た人の世界観が少しだけ変わったり、自分の新しい側面に気づいたりすることを誘発するとい



う点でした。いま僕がパターン・ランゲージで行っていることも、まさにそういうことです。

実はラーニング・パターンを本格的につくった後も、社会現象のネットワーク分析などの研究も並行して行っていました。でも、いまはもうそれらの研究は全部やめて、パターン・ランゲージの研究一本に絞っています。そうやって絞っても、まだやりたいことのほんの一部しかできていません。他の研究者がすでにやっている領域はその人たちに任せるとして、自分にしかできない研究をやつていきたいと思っています。

### ——研究会の雰囲気はどうですか。

とても明るく楽しくやっています。メンバーは三分の二ぐらいが女子学生で、華やかで明るい感じですが、でも、みんなすごく芯があつて、ガッツを持っているのが特徴かな。パターン・ランゲージをつくる過程では、地道な粘り強さが求められます。そして、コミュニケーションもつくる上で大切なので、みんなよくしゃ

べります。話しながらつくっているという感じですよ。

井庭研の特徴として独特なのは、僕もプロジェクトメンバーの一員であるという点です。学生の活動にアドバイスをするという感じではなく、僕も一緒に手を動かして、つくり手の一人として活動しています。教員と学生と一緒にグループワークをしているという感覚です。

——いままで生まれてきたパターン・ランゲージで一番特徴的なものは何ですか？

どのプロジェクトも成果はユニークなのですが、最も社会的に反響があると感じるのは、認知症とともによりよく生きるためのパターン・ランゲージです。書籍『旅のことば』（井庭崇・岡田誠 編著、丸善出版、二〇一五年）として出版しました。このパターン・ランゲージは、困っていたり悩んでいたりする人たちに、これまでとはまったく違う発想で新たな光をもたらしたようで、反響の度合いがこれまでとは違いま

す。現場で取り組んでいるお医者さんや看護師さん、介護関係の方から、「こういうものが欲しかったんだ」「これはぜひ使いたい」という声を多く聞きます。

これから井庭研究会でパターン・ランゲージをつくるにあたって、創造社会に向かってその勢いを後押ししていくようなものをつくっていきたいと思っています。多くの人がそれぞれのやり方で創造的に生きていくことを支援したい。そう思っています。

——高校生やSFC生にメッセージはありますか？

ふだんみんなが当たり前に行っていることのなかには、他の人にとつて新しい発見につながったり、希望をもたらしてくれたりする秘訣とその経験が詰まっています。自分にはそういうものがたくさん詰まっているのだということを認識し、まずは、いまの自分を認めることが大切です。

その上で、友達や周囲の人、そし

て各分野の先人たちから学べるものがたくさんある、自分には学んで成長できる余地がまだまだあるという感覚、これも大切です。このことは若いときだけでなく、歳をとつても同じです。学び成長し続けることの可能性とおもしろさを味わいながら生きていけるとよいですね。



中西 泰人

(なかにし・やすと)

環境情報学部教授

専門はインタラクションデザイン、  
ヒューマンコンピュータインタラクション

## 中西泰人研究会

——中西先生の研究分野について教えてください。

主にインタラクティブなシステムを作っています。インタラクティブというのは相互、双方向を意味する言葉で、インタラクティブな物という、使ったり見たりする人でも参加できて楽しめるような物を指します。Phoneアプリや美術館に展示されている作品まで、最近ではさまざまな物があると思います。

僕がこれまで作ってきた物の多くは、かっこいい画面や分かりやすいアプリなどのヒューマンコンピュータインタラクション(HCI)だけでなく、ヒューマンヒューマンインタラクション(HHI)も意識して作っています。たとえばツイッターやフェイスブックなどのソーシャルアプリは向こう側に誰かがいることが前提になっていますよね。一方、ワードやイラストレーターなどの作業用のアプリを使うとき、そこには人とコンピュータの関係しかありません。アプリを作る上で、その向こう側に人がどのように存在している

かという観点はとても重要です。

インタビュアをするときでもそうですが、取材相手と取材をする人の座る位置によつて緊張感や距離感が変わって、そこから話す内容も変わってくるんです。対面に座ると面接のような緊張感が生まれるし、隣に座ると友達といるときのようなリラックスした空気になります。場所やシチュエーション、距離や角度などが、人が関係を構築していくことにとても密接に関わりがあります。そういったことは社会学や心理学、建築学の分野に関わってくるのですが、これらの分野の知見を踏まえた上で、インタラクティブなシステムを作っています。研究を進める中でそうした知識を幅広く吸収しました。それでコンピュータを使わないコミュニケーションも研究やデザインの対象としていて、オフィスやワークショップのデザインなども行いました。

——現在ほどのようなものに取り組んでいらつしやるのですか。

最近関心があるのは、人間同士のコミュニケーションにおける身体性についてです。インタラクティブなシステムを作るにあたって、何かが上手くなれるようなシステムを作っています。より具体的には、身体的な技能をより良く真似するにはどうすれば良いかということに研究しています。

中学高校の英語の授業で、よくネイティブの先生から「repeat after me」と言われますよね。リピートするというのは真似をすることと同じことです。そして、英語に限らずスポーツなど身体的な技能を習得するためには、真似と基礎知識の学習の間を行ったり来たりする必要があります。

僕はアメリカに滞在する前に改めて英語を学んだのですが、当時教えてくれたいた体の大きな黒人の先生から「俺の唇をよく見る」と言われていました。そのとき、日本人の僕と黒人の先生では唇の形も厚さも違

うから、真似しづらいなあと思つていたんです。そう思いながらもネイティブの英語の喋り方を調べてみると、日本人とは顔の筋肉や肺や横隔膜の使い方が違うというのを知りました。とはいえあまりにも身体的特徴が自分と異なる我真似しづらなし、英語に対するハードルも高くなつていきますよね。

そんなときに、自分の顔をベースに唇や顔の動かし方はネイティブにしてくれる画像処理システムを作ることができれば、真似をするときに将来の自分をイメージしやすくなるのではないかと思つたんです。外国人の先生を真似するよりも、見慣れた馴染みのある自分の顔を真似した方が、発音するイメージが湧きやすいですよ。実際に、単にネイティブの人の動画を見て真似するよりも、顔は自分だけど口と顔の動かし方はネイティブという仮想的な自分の将来像を見ながら真似したときの発音の方が、発音としての評価が高いという結果ができました。このように、コンピュータを使ってより良く真似をすることは、何かを習得するとき

の一つの解決策になると思います。

この考え方は語学だけでなく、スポーツにも応用できます。特に男性は、小さい頃に憧れの野球選手やサッカー選手の真似をしたことがあると思います。それって実はスキルの獲得にすぐ効果的で、プロの選手もうまくなる秘訣として「好きな選手の真似をしろ」とよく言っています。そこで、たとえばサッカーフィールドに憧れの選手のドリブルの軌跡が描いてあれば真似したくなるだろうし、さらにその選手のリズムでその軌跡の上を動くロボットを作れば、もつと真似したくなるだろうし、真似をしやすくなるんじゃないかと思つて研究しています。

いま紹介したようなシステムの概念を示す言葉として、「フューチャーロイド」という造語を作りました。最近ジェミニロイドという自分と瓜二つのロボットがありますよね。ジェミニというのが双子という意味で、ノイドというのがのののようなものという意味なので、双子のようなものをどこまで作り込めば人間は人間の

存在感を感じるだろうかという研究です。

それに対してフューチャーロイドは、将来という意味のフューチャーという言葉を使っています。ジェミニロイドは今の自分と同じ存在感を放つものを作るにはどうすれば良いかという研究ですが、フューチャーロイドは、どうすれば将来の自分と考慮するものを作れるかということを研究しています。

——研究会はどのように進めているのですか。

最初の一学期間でいきなりオリジナルの物を作るとするのは難しいと思うので、まずはコピーからトライしてみようとアドバイスしています。たとえば楽器をはじめても、最初からオリジナルを作曲するのは無理ですよ。普通は好きなアーティストの曲のコピーをすることからはじめませんか。ですから、最初は自分がおもしろいと思つた作品をできるだけたくさん集めてきてもらいます。十五個くらいはだいた

いすぐに集まるのですが、三十個も集めるとなると難しいんですよ。

でもそれぐらいの数を集めてみると、なんで自分はこの三十個をおもしろいと思つているのだろうという理由が浮かぶぐらい風景が広がっていると思うんですよ。そしてそこから三つくらいに絞つて、自分でもコピーができそうなものを選んでやってみるという方法で進めています。

もちろん永遠にコピーしていても意味がないので、ある程度コピーができたら次にカバーをしてもらいます。カバーって、オリジナルの雰囲気を壊さずに自分のキャラクターを付け足さなければいけないから、技術を持っていないとできないんです。そこまでしてようやく、オリジナルの物を作ってもらいます。どのようなペースで進めるかは個人に委ねています。

——研究会にはどんな学生が多いのですか。

基本的にプログラミングをして物を作るので、プログラミングに関心が

あり、さらにおもしろいものを作りた  
いと思っている人が多いと思います。  
プログラミングがまったくできない  
学生はいませんが、全員プログラミン  
グが得意なわけではないので、研究会  
のなかで少しずつトレーニングして  
経験を積んでいっています。

モトローにしていることは、全員  
が必ず自分でなにかを作ること  
です。なにかしらインタラクティブな  
物を作ることにはしているので、抽象  
的なコンセプトしか浮かばない人に  
は多少厳しいとは思いますがけれど。

基本的にはそれぞれのインタラク  
ティブなシステムを作っていれば内  
容は問わないので、空間設計に関心  
がある人もいれば、映像作品やウエ  
アラブルデバイスを作っている学生  
も多くいます。そういう意味では、  
すごく自由な研究会だと思っていま  
す。

——学生にはどのようなようになってほし  
いと思っていますか。

知的好奇心が旺盛で、貪欲に研究  
できる人でしょうか。テクノロジー

が進歩して新しいツールやソフトが  
開発されると、人間や社会が変わっ  
ていくと同時に新しい常識が出来上  
がってきます。こうした研究のおも  
しろいところは、そういった社会の  
変遷に自らが関われることです。

たとえば、携帯電話が一般に普及  
するまでは、電話番号を人に教える  
ことに抵抗がある人がほとんどだっ  
たんですよ。携帯電話を持つこと  
でいつでもどこでも電話がかかっ  
てきたら困ると思っていたわけです。  
今では逆に、いつでもどこでも連絡  
がとれないと困りますよね。その頃  
は、インターネットも一般に普及し  
ていなくて、大学にしかなかった。  
だからみんなインターネットを使  
いに大学へ行くという時代でした。今  
はインターネットを使うことが当た  
り前になって、ネットが使えるだけ  
で喜ぶということはなくなりまし  
た。

つまり、テクノロジーが変わると  
みんなが思っている当たり前は変  
わっていくということなんです。そ  
の遷り変わりをしていると、人間っ  
てどういう生き物なんだろうと考え

ざるを得ないんです。新しく綺麗  
な物を作りたいと思うだけでなく、  
さらに人間の常識まで変えていき  
いとまで考えてほしいですね。  
ちよつとおもしろい物を作って終  
りだと思わずに、学部時代に満足  
できるものが作れなかったら大学院  
に進んで完成させてやるぞくらいの気  
概があると、社会に出てもやってい  
けると思えます。

——SFC生に一言お願いします。

SFCの理念はトライ&エラーだ  
と思うんですね。たとえばSFCは  
頻繁にカリキュラムを改定するじゃ  
ないですか。僕は教員になってから  
三つの学校で教えてきましたが、他  
の大学ではそう頻繁にカリキュラム  
を改定しないので、すごく驚きまし  
た。大学をより良くしていくために  
苦勞を厭わないそうした校風は素晴  
らしいと思います。だからこそ、こ  
こで勉強する学生のみなさんには積  
極的にトライ&エラーを繰り返して  
もらいたいです。

話は変わりますが、先日、講義の

後に就職活動に関する質問をされま  
した。「有名大学に入つて就職活動  
が大学生活のゴールだと思ってい  
る人もいるようですがどう思います  
か?」と聞かれたんです。就職活動  
が大学生活の第一の目的だと思つて  
いる人は他の大学だったらくさん  
いると思うんですよ。でもこの大学  
は都心から遠くて、通うのも一苦勞  
ですよ。就職活動のためだけにわ  
ざわざこんな遠いキャンパスに来  
るなんて、もつたいない。それだつ  
たら、後先考えずに自分の好きなこ  
とをとことん突き詰めた方がよい。

今年でSFCは二十五周年を迎え  
ますが、いろいろな学生と先生がそ  
れぞれのスタイルでトライ&エラー  
を繰り返しています。その姿を受け  
継いでいくような学生が社会で羽ば  
たくことができればいいなと思いま  
す。

## When I was young

学生にとって、教員はどこか遠い存在である。  
しかし、そんな教員にも学生だった時代がある。一体どのような学生生活を送り、  
それは、その後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。  
今回は、太田喜久子看護医療学部教授に若かりし頃を振り返ってもらった。



高校1年生のときにクラス全員で出かけた千葉の牧場にて

太田喜久子

——ご経歴からお話いただけますか。

私は聖路加看護大学（現、聖路加国際大学）の衛生看護学部を一九七五（昭和五十）年に卒業しました。卒業後は、あまり長くなかったのですが、臨床で助産師として働きました。それから基礎看護学の領域で母校の助手、今で言う助教として働いていました。たまたまそのポストが空いていて、「あなたどう？」と言われたんですね。どうしようかと迷ったのですが、引き受けました。それ以来、看護教育に携わっています。

私が働きはじめたころ、国内でようやく看護系の修士課程ができました。そこで修士課程に進学し、修了後、以前と同じく基礎看護学の領域で復職しました。そうしているうちに今度は国内で初めて博士課程ができたので、開設二年目に進学しました。結果的に修士課程も博士課程も開設と同時期に学ぶ機会を頂くことになりました。

助教、今でいう准教授として教えていたころは基礎看護学を専門とじていましたが、少し迷いが生じ、博士課程を終えるころには老年看護学を専門にしようと思えました。そして、老年看護学を専門にして働きたいと思っていたところ、宮城県が県立の大学を創設するというからお声を掛けていただき、開設時から二〇〇一年三月までの四年間、老年看護学の教授として教鞭をとりました。その後二〇〇一年四月に慶應の看護医療学部が設置されるというこゝとで、やはり老年看護学の教授として赴任することになりました。

——老年看護学を専門とされるのはなにかきっかけがあったのでしょうか。

基礎看護学を専門にしていたときは、基本的なことに立ち戻って、看護とは何か改めて考え、看護理論や看護の原点である援助技術についても学び、学生に教育しました。

一方で、基礎看護学で扱う内容は

普遍的なものなので、対象を特化した看護をやりたいとも思っていました。博士課程への進学を考えはじめた時期に幼いころからずっと一緒にいた祖父が認知症になっていく様子を目の当たりにしたことが、今になってみると直接的なきっかけだったように思います。

祖父は結局百歳まで生きました。今でこそ百歳を超える高齢者は何万人といいますが、昭和の終わりころには本当に珍しかったので、長寿のおじいさんとして地元では有名でした。元気はつらつと生活していた祖父の物忘れがみるみるひどくなり、いろいろなことができなくなるといふ経過を愕然とする思いで見えていました。

その経験から日本の高齢者や将来のあり方について考えはじめました。高齢者人口はさらに増えていくなか、高齢者へのケアが重要になってくるのだと考えると切羽詰まる思いがしました。それまでは、老年期というのには成人期の後半にあたることを考えられており、老年看護学という

独立した教育・研究分野はありませんでした。もちろん、すでに人口統計に基づいた社会の展望が議論されていました。教育機関での看護学はそれに即応できる十分なカリキュラムを持っていませんでした。私自身それではいけないと感じたので、成人期のなかの老年ではなく、老年看護学という高齢者の特性を捉えた看護を専門にしようと思えました。そのころはまだ老年看護学は過渡期で、教科書は出来はじめていたましたがカリキュラムは確立していませんでした。

——看護を学ぼうと思われたきっかけはなんでしょうか。

小さいときから、自分はどうやって生きていくのかな、どういう人になりたいのかなと考えていました。でも、小さいときから「ナースになりたい」というように具体的に思っていたわけではないんですよね。自分の人生を考えはじめたときに、何か手に職をつけたい、仕事をしてい

く人でありたいと漠然と思っ  
ていました。具体的な職種を決めるのに、

高校二年生のころからとても悩ま  
ました。看護に進むのか、そのころ興  
味のあつた障害者のための特殊教育  
を学ぶのか決めかねていました。ど  
ちらにせよ大学に進学し、資格を取  
得して世の中の役に立つような生き  
方をしたいと思っていました。

大学への進学はその当ても珍しく  
はありませんでしたが、看護に進も  
うとする人は少なくとも私の周りには  
いませんでした。看護をやりたい  
と言うと、「なぜ？」と特異な目で  
見られたり言われたりしました。高  
校三年時の担任の先生からは、そん  
なところに進まないほうがいいと反  
対されました。そもそも、看護系の  
大学がその当時十一校しかありませ  
んでしたし、ほとんど存在を知られ  
ていませんでした。多くの人々が、  
看護師になるための学校は専門学校  
だと思っていたのです。大半の人々  
が大学で看護教育があることを知ら  
ないし、看護師の仕事はつらくて大  
変だという認識を持っていたので、

なぜわざわざそういう世界に飛び込  
んでいくのかと反対されました。

でも、賛成してくれる人もいたん  
ですね。高校二年時の担任の先生は  
「すごく良い仕事だと思うよ」と激  
励してくださいましたし、保健室の  
養護教諭の先生もご自身が看護を学  
んだ経験からどういふ学校があるの  
かアドバイスをしてくださいまし  
た。また同じ高校の先輩が聖路加に  
進学していたので、いろいろ話を聞  
かせてくれました。家族とも相談し  
ましたね。

進路についてはたくさん悩みまし  
たが、最終的にさまざまな人を対象  
に援助できるという点と、直接人の  
役に立ちたいという強い思いから看  
護の道を選びました。悩むだけ、考  
えただけの価値はあつたと思ってい  
ます。

——先生はどんな子どもだつたので  
しょうか。

小学校のころは「はいはい！」つ  
て、挙手して積極的に自分の意見を

言うような子ではありませんでした  
よ。いつもじつとしていました。先  
生に指されると答えるので、よく「答  
えられるんだつたら、ちゃんと手を  
挙げて発表しなさい」と怒られてい  
ました。小学校も高学年になると、  
決して自主的にはやらないだけだ  
けでも、学級委員などをやらされるよ  
うになっていました。

ちょうど小学六年生のとき、東京  
オリンピックが開かれました。学校  
から青梅街道まで行つて聖火リレー  
の応援をしましたね。開会式の日  
教室の窓から外を見上げたら、五輪  
のマークが見えました。その期間は  
ほとんど授業がありませんでした。  
減多にない機会だということで、担  
任の先生がはりきつて「今日もテレ  
ビを見ましょう」と言つて、クラス  
のみんなでテレビ観戦をしました。  
オリンピックができたことはみんな  
嬉しくて、ようやく日本が世界の仲  
間入りをしたんだという印象を持ち  
ました。本当にすごいことだつたん  
ですね。そういう高揚感のある体  
験でした。小学校時代が一番の思い

出ですね。まさか、自分が生きてい  
る間に東京で二度も開催されること  
になるとは思いませんでした。

中学時代は、九人制のバレーボー  
ル部に入部していました。中学三年  
ではキャプテンを務め、都大会まで  
出場しました。顧問の先生は割と厳  
しく指導される方で、炎天下でも練  
習しました。そのときは保護者も心  
配して、牛乳を差し入れしてくれた  
ほどでした。中学生のころは身体を  
動かして活発にしていましたね。

高校生のころは、テニス部に入り  
ました。私が進学した高校は共学で  
したがもともと女子校だったので、  
女子学生の割合が多かつたんです  
ね。テニスは女子学生に人気だつた  
ので、入部希望者が殺到しました。  
そしたら人数が多すぎて把握できな  
かつたんでしょね、新入部員に背  
番号をつけさせてその番号で呼んだ  
んです。「○番、球拾い！」みたいに。  
私は番号で呼ばれるようなところに  
いたくないと思い、辞めました。そ  
のことは私にとつて挫折の体験のひ  
とつとなり、その後はじっくり一人

## When I was young

で考えるようになりました。そのころから、将来について考えるようになりましたね。

——最後に高校生へのメッセージをお願いします。

看護に興味がありつつも、迷っている方も多いのではないかと思います。私も高校生のころに将来を決めることは簡単ではありませんでしたし、みなさんも同じ悩みを抱えているのではないかと思うんです。

看護というと、病院で働く看護師さんをイメージすることが多いですよ。今みなさんに伝えたいのは、看護の道に進むということは、病院で働くことだけじゃないですし、生き方を限定しているわけでもないということ。看護を学んだ上で、資格を活かして働くという選択も、そうじゃない選択もあつていいと思うんです。

しかも、資格を活かして働くといっても、病院だけでなく、さまざまな施設や在宅、また地域の行政や

企業でも働くことができます。また、対象者もさまざまで、学校にいる児童や生徒、企業に勤める会社員、あるいは障害をもっている方々も考えられます。

さらに、看護が担う健康へのアプローチというのは、病気を持つている人への援助はもちろんのこと、健康な人がさらに元気になつて毎日を過ごせるように働きかけること、あるいはその方らしく生を全うし最期を迎えられるように援助することなど、非常に多様です。お腹のなかの赤ちゃんから高齢者まで、世界中さまざまな文化の中で生活する人々のためにできる仕事は他にはあまりないのではないのでしょうか。みなさんにはぜひそのことを知っていただきたいと思つています。

看護という学問を学んでいれば、自分自身はもちろん、自分の家族や子どもなど身の回りの人々の健康を守ることもできますよね。なので、みなさんがどのように生きようとも、この学問は本当に力になります。学んだことを自分のやり方

で活かしていくことができるのです。

まずは、学生時代は好きなことに取り組んでみて、それで少しずつ自分のやりたいことを見つけて、ときにはやり直してもいいんじゃないでしょうか。私も今は高齢者へのケアを専門としていますが、最初は助産師として赤ちゃんをみていたわけです。そのときどきよく考え選択をし、みなさんにはそれぞれ自分らしい生き方をしてほしいと思います。



太田 喜久子  
(おおた・きくこ)

看護医療学部教授  
専門は老年看護学



**発行人**

奥田 敦 (湘南藤沢学会会長)

**編集長**

佐藤 響子 (環境情報学部 3年)

**副編集長**

林田 早紀子 (環境情報学部 3年)

坂本 美佳 (看護医療学部 2年)

**編集スタッフ**

武藤 真理子 (環境情報学部 4年)

中村 幸嗣 (総合政策学部 3年)

樋口 誓一郎 (環境情報学部 2年)

佐藤 彩華 (看護医療学部 2年)

高城 栄一郎 (環境情報学部 1年)

**湘南藤沢学会**

KEIO SFC REVIEW 担当幹事

清水 唯一朗 (総合政策学部准教授)

**事務局**

田坂 真美

**From Editor**

59号を手にとっていただき、ありがとうございます。

58号、59号とSFCの「今までよく知られていなかった」場所を取り上げてきました。今回は看護医療学部でしたが、いかがでしたでしょうか。

弊編集部にも看護医療学部の学生がいますが、特集企画を決める際に、そもそも看護医療学部はSFCなのか？ということが議論になりました。湘南藤沢にあるキャンパスであることは間違いありませんが、開設して14年の看護医療学部をよそにキャンパスでは「SFC25周年」とお祝いしている。カリキュラム上、総環との完全な同化ができないことで、境界が曖昧になっているのでしょうか。

しかし、看護医療学部にも総環で大切にされているSFCスピリットが確かに流れています。他学部の授業を受けることができることに象徴されるように、医療分野をここまで多角的に見ることを意識している教育機関は、日本でもそう多くはないのではないでしょうか。だからこそ、看護医療学部の卒業生は多分野に羽ばたいていっているのです。

トライ＆エラーを続けるSFCにとって、看護医療学部は欠かせない存在です。広報誌であるSFC REVIEWで看護医療学部のことを知ってもらい、たくさんの方々が「SFCの看護」について考えるようになることを願っています。

2015.11.01 佐藤響子

**発行日**

2015年11月20日

**発行所**

慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

gakkai@sfc.keio.ac.jp

**製作・印刷**

株式会社ワキブリントピア

〒252-0815 神奈川県藤沢市石川 6-26-19

0466-87-5811

<http://www.printpia.co.jp/>

無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。  
最新号およびバックナンバーをご希望の方は湘南藤沢学会までご連絡ください。

KEIO SFC REVIEW は  
学生編集スタッフを募集しています。

興味のある方は、[keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp](mailto:keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp)  
までご連絡ください。

募集中



KEIO UNIVERSITY SFC

25<sup>TH</sup>

ANNIVERSARY

KEIO SFC REVIEW

ISSN 1343-3318